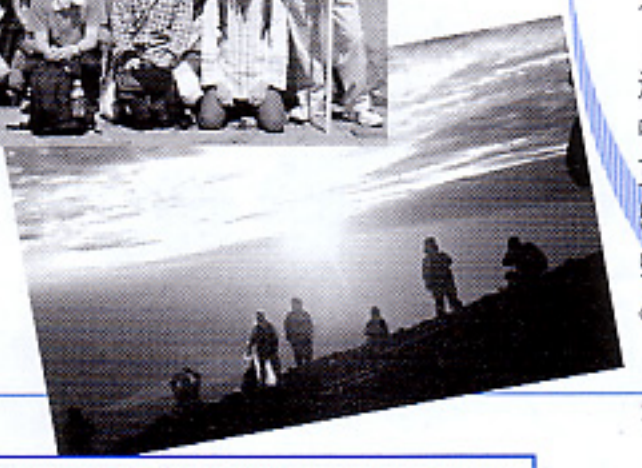
富士登山交流

青年委員会

8月24～25日、青年委員会が主催する「富士登山交流」を実施しました。

富士山の雄大さ、美しさは、名実ともに日本一。昔から、日本人の私たちの心の中にそびえています。しかし、現在では観光道が整備され、多くの観光客や登山者によるゴミの投棄で、原生林が破壊されているのです。

私たちはその事を理解しながら、環境問題・保護のあり方を考え、当初『みんなでゴミを拾いながら山頂を目指そう!』と決めていました。しかし、初の企画と体力の不安から、ゴミ拾いの計画は断念され、この眼で現実を直視すると共に、力を合わせて登ることで連帯感を醸成し、なんと言っても自分への挑戦! ほんの少し目標を修正し、山頂を目指しました。



ここで、2日間の『男女27名富士登山物語』を少し…

平均31歳、男19名女8名総勢27名。富士山の登山経験者は6名、中には今夏3度目というつわものから登山未経験、そして体力にまったく自信なし、といったバラエティー豊かな参加者が目指すは、山頂でみる御来光!

思いを胸に13時10分五合目をスタート! 出発30分で高山病?にかかり、頭痛を訴える人もいました。

しかし、みんな本当にえらかった! 班の仲間を励まし合い、お互いペースを合わせ一歩一歩と前に進みました。途中、体力に自身のある何名かは、ゴミ拾いを実践していました。また、八合目付近では外国人親子の子どもが高山病でうずくまり、一歩も動けない状況でした。そんな中、自分の酸素スプレーを差出す仲間がいたのです。本人だって辛かったと思うし、これからどのようになるか分からない状況なのに、この行動には本当に脱帽でした。

最終班が19時に山小屋到着。満員の山小屋での仮眠は予想以上に辛く、眠ろうと目を閉じても、酸素が薄いのが感じられ心臓はバクバク、寝返りもうてず、あちらこちらから聞こえる寝息や物音。辛くなり、外へ出てみると遠くかなたの夜景が目の前に…。そして満月…。シーンと静まり返った大自然の中で、かなりドラマの主人公になっていました。

仮眠後、山頂へラストスパート。山道は登山者で大渋滞。わずか標高差300mがとてもとても遠く長い。途中リタイヤの某S副事務局長を残し、約1時間30分で山頂に到着。気温わずかに1度、御来光まで寒さをしのぎ、5時15分…。雲のかなたから御来光が見えると、あちらこちらから拍手と万歳が…。自らの挑戦への達成感と太陽の光が反射して、皆輝いて見えました。

特派員 K.Y

労使合同研究委員会の名称は“新時代労研委”に決定!!
～第1回小委員会を開催～

今年3月、連合群馬と群馬県経営者協会は、県内の厳しい雇用情勢を踏まえ、『雇用安定推進宣言』を締結しました。

そしてそのなかで、今後の群馬県における先進的な労使関係の構築を目指して、日常的な協議の場として“労使合同研究委員会”の設置を確認しました。

この委員会においては、雇用問題を中心に労使間で共有できる課題、連携すべき課題などの整理・検討を行ない、群馬県経営者協会は会員企業に、連合群馬は構成組織にそれぞれ働きかけ、より良い労使関係の構築を目指します。それと同時に、行政に対し雇用対策関連の諸施策について政策提言を行い、県内全ての企業とそこで働く仲間に対する「社会的な環境整備」も行います。

この研究委員会を進めるにあたり、去る8月6日に、双方の全体的な方向性を確認するための小委員会を開催しました。

経営者協会は藤生労務委員会委員長,松井専務理事,手島事務局長,五十嵐課長代理が出席し、連合群馬は清村事務局長,中川・富澤副事務局長,坂上書記が出席しました。

小委員会では、研究委員会の目的と任務を再確認した上で、今後の論議の進め方や具体的な検討課題について話し合いました。

その中で、研究委員会の名称を『新たな時代における労使合同研究委員会(略称“新時代労研委”)』とし、小委員会の位置付けを『新時代労研委の実効性を高めるための企画・立案をする場』とすることを確認しました。

具体的な課題としては、連合群馬から①群馬における中高年者の雇用のミスマッチ解消に向けた課題整理と環境整備、②群馬県緊急地域雇用創出特別基金事業についての2点を提起し、問題点の共有化と取り組みへの理解を求めました。

最後に経営者協会側から『この小委員会は今回の雇用問題に限らず、両者のホットラインとして様々な議論を交わす場としたい。』との提案があり、今後、幅広い課題について意思疎通をはかる場として育てることで合意し、将来につなげることを約束しました。